

遠隔授業不適切学習行動と学習動機づけとの関係分析

白澤 秀剛^{*1}, 岩屋 裕美^{*2}

^{*1} 東海大学, ^{*2} 川崎市立看護短期大学

Relationship between Learning Motivation and Inappropriate Learning Behavior in Distance Learning

Hidetaka SHIRASAWA^{*1}, Hiromi IWAYA^{*1}

^{*1} Tokai University, ^{*2} Kawasaki City College of Nursing

遠隔授業はコロナ禍での暫定措置で終わらず、今後も継続的に大学・短大の授業形態の1つとして利用されていくと予想される。しかし、遠隔授業ならではの不適切学習行動が指摘されており、対策に頭を悩ませている教員も多数いると予想される。不適切学習行動については現在のところ十分な分析や研究が行われていない。そこで、我々は遠隔授業不適切学習行動の頻度と同時に学習動機づけ尺度を調査し、不適切行動がどのような頻度で行われ、学習動機づけと関連があるかどうかを検証する分析を行なった。分析の結果、不適切学習行動と学習動機づけとに関連があることが示された。

キーワード: 遠隔授業, 学習方略, 動機づけ

1. はじめに

大学等における遠隔授業の取扱いでは、同時性又は即応性を持つ双方向性(対話性)を有し、面接授業に相当する教育効果を有すると認められる授業科目については、遠隔授業の授業時数が半数を超えないという条件で面接授業の授業科目として取り扱うことができるという発表がなされた⁽¹⁾。遠隔授業はコロナ禍の緊急措置として導入されたが、今後の大学の授業においても、遠隔授業の形態で実施される授業が一定数残っていくことが予想される。

遠隔授業では、教師や仲間からの影響が少なくなるため、自分の学習プロセスに主体的に関与していくことがより一層求められる。しかしながら、これまで著者らが行った遠隔授業における主体的学習に関する調査では、遠隔授業の仕組みを利用した不適切な学習行動(以後「不適切学習行動」)の存在が明らかになっている⁽²⁾。遠隔授業の不適切学習行動については、学業上の不正行為としての報告⁽³⁾⁽⁴⁾はあるが、遠隔授業の問題点としての指摘にとどまり、不適切学習行動の実態やその要因に関する報告は限られている。

一方、遠隔授業の学習環境と学習効果を調査した研

究では、「機器トラブルが心配」「課題提出状況の提示」「学内 Wi-Fi 環境の整備」「アプリケーションの充実」といったシステム面や、「課題の負担が大きい」「教員や学生とのコミュニケーションが図りにくい」といった授業方法に対するニーズが高い傾向にあり、「意見や質問がしづらい」「知識や技術が身についているか心配」「集中力が続かない」など自身の学習パフォーマンスに対する意見は前者に比べて少ない割合となっている⁽⁵⁾。この結果を見ると、学生のニーズは授業への興味や関心、内容の習熟よりもシステム面に向いていることが読み取れる。

遠隔授業では、学ぶことに積極的な学生ほど学習への取り組みやすさを感じていることが報告されており⁽⁶⁾、不適切学習行動をとる学生ほど、自律的な動機づけが低いことが予想される。そこで本研究では、遠隔授業における不適切学習行動と学習動機づけとの関連について分析をおこない、不適切学習行動をとる学生の動機づけの状態を明らかにする。

2. 質問項目

遠隔授業における学習行動調査には、46問で構成さ

れる遠隔授業用主体的学習分類尺度の開発で使用している質問項目を利用した²⁾。遠隔授業時の学習行動頻度に関する各質問項目に対して、「ほとんどしない(10%以下)」から「いつもする(90%以上)」までの5件法で回答させた。今回の分析に使用した不適切行動の質問項目は表1に示す。

表1 遠隔授業不適切行動質問項目

設問	設問内容
Q8	体調不良や特別な事情がなくても、単位認定に影響がない範囲で授業を欠席する
Q27	ライブ授業にアクセスはしているが視聴していない(寝る・離席するなど)
Q28	ライブ授業にアクセスはしているが、その授業とは関係のない作業をしている(別の授業の課題・ネット閲覧・スマホ操作、移動中など)
Q29	オンデマンド動画の再生はするが、視聴はしない(寝る・離席するなど)
Q30	オンデマンド動画の再生をしながら、その授業とは関係のない作業をしている(別の授業の課題・ネット閲覧・スマホ操作、移動中など)
Q32	ライブ授業では冒頭だけアクセスして途中で退室する
Q34	課題内容がほぼ空欄でも提出する
Q35	重要語句や答えだけを丸暗記する
Q39	課題実施にライブ授業録画やオンデマンド動画の視聴が必要であっても、見ずに課題を実施する
Q40	理解できない授業は途中で視聴をやめる
Q42	課題やレポートは友人の解答を写したり、少し変更したりして提出する

Q27, Q28, Q29, Q30, Q32, Q39, Q40は遠隔授業提供の仕組みを利用した不適切行動で、著者らを含む3名の研究者が参加した学会やFD研究会などの報告事例を参考に抽出したものである。Q8, Q34, Q35, Q42は対面授業でも見られる不適切行動で、遠隔授業においても行っていると予想される行動である。

この学習行動頻度と比較分析をする尺度として、岡田らの大学生用学習動機づけ尺度⁷⁾を用いた。この尺度は5件法34問で構成され、「外発」「取り入れ」「同一化」「内発」の4つの下位尺度で構成される。

2.1 調査方法

調査は2つの大学・短大にて2021年度に実施した。

1つの大学は2キャンパスで調査したが、学部学科が

全く異なるため、実質的には3大学での調査と同等である。

Webフォームを用意し、QRコード及びURLを提示して回答を依頼した。1~2週間程度の回答期限を設け、回答者の都合の良い時間にPCまたはスマートフォンなどで回答してもらった。回答欄末尾に「研究利用拒否」欄を設け、この欄にチェックした回答については分析対象から除外した。最終的に得られた研究利用可能な有効回答は415件であった。

2.2 倫理承認

本調査にあたっては東海大学「人を対象とする研究」に関する倫理委員会(承認番号21032)の承認を得て実施した。

3. 分析結果

3.1 遠隔授業不適切行動の頻度分布

表1で示した遠隔授業不適切行動の回答分布を表2に示す。Q32の「ライブ授業では冒頭だけアクセスして途中で退室する」を50%以上の頻度で行っている学生は1.7%(n=7)と少ないながらも存在していることが確認できた。Q28, Q30の「授業中に授業とは関係のない作業をする」を50%以上の頻度で行っている学生は、それぞれ18.1%(n=75), 13.7%(n=57)と少し多くなっている。遠隔授業は教員の監視の目が届かないことと、集中力を維持するのが対面授業と比べて難しいことが原因と考えられる。Q39「学習動画を視聴せずに課題を実施する」の行動をさせないための工夫はFD研究会などでも散見されるが、今回の調査でも50%以上の頻度で行っている学生が9.5%(n=40)存在していることが確認できた。これは課題の負担が大きいことと関連していると考えられる。Q35「重要語句や答えだけを丸暗記する」は対面授業でもよく見られる行動で、50%以上の頻度で行っている学生が27.2%(n=113)と遠隔授業においても多いことがわかる。その他の不適切行動を50%以上の頻度で行う割合も5~10%程度になっており、教員の直感的な認識通り少ないながらも存在していることが確認できた。

表 2 遠隔授業不適切行動の回答数(%) (n=415)

設問	ほとんどしない(10%以下)	ときどきする(30%程度)	するときとしないときがある(50%)	よくする(70%程度)	いつもする(90%程度)
Q8	331 79.8%	26 6.3%	24 5.8%	20 4.8%	14 3.4%
Q27	287 69.2%	82 19.8%	23 5.5%	18 4.3%	5 1.2%
Q28	201 48.4%	139 33.5%	51 12.3%	20 4.8%	4 1.0%
Q29	320 77.1%	56 13.5%	23 5.5%	13 3.1%	3 0.7%
Q30	242 58.3%	116 28.0%	40 9.6%	13 3.1%	4 1.0%
Q32	394 94.9%	14 3.4%	3 0.7%	3 0.7%	1 0.2%
Q34	359 86.5%	33 8.0%	13 3.1%	3 0.7%	7 1.7%
Q35	174 41.9%	128 30.8%	79 19.0%	31 7.5%	3 0.7%
Q39	311 74.9%	64 15.4%	29 7.0%	6 1.4%	5 1.2%
Q40	324 78.1%	64 15.4%	20 4.8%	6 1.4%	1 0.2%
Q42	366 88.2%	29 7.0%	17 4.1%	1 0.2%	2 0.5%

3.2 不適切学習行動頻度と動機づけの分析

表 2 の不適切学習行動頻度で「ほとんどしない」と「ときどきする」と回答したグループを低群, 「するときとしないときがある」「よくする」「いつもする」と回答したグループを高群として 2 つに分けた. 低群と高群で 4 種類の動機づけについて差があるかを検証した結果を表 3~6 に示す. 動機づけの分布は正規分布を仮定できないため, 有意差の検定には Mann-Whitney の U 検定を用いた.

Q35「重要語句や答えだけを丸暗記する」は全ての動機づけで有意差が見られる. Q35 の高群は学びの喜びや必要性よりも義務感で学習していることがわかる. Q39「動画を見ずに課題を実施する」, Q40「途中で視聴を止める」の高群も外発的動機づけに有意差があり, 義務感で学習を行っていることがわかる. 単位取得を

意識させて安易に学習を促すと Q35, Q39, Q49 のような行動が増える可能性が示唆される. 一方, Q27, Q28, Q29, Q30, Q32 の遠隔授業中に寝たり別の作業をしたり退出したりなどの高群は外発的動機づけには有意差がなく, 内発的動機づけが有意に低い. 学ぶ意義や楽しさを理解できないためにアクセスはするが集中力が続かないといえる. 遠隔授業は教員が学生の様子を随時監視して学習を促すことが難しい. オンデマンド形式ではほぼ不可能である. 遠隔授業で効果的な学習を促すには, 対面授業以上に丁寧な学習意義の説明や学びの必要性の理解を促すことが重要であることが改めて明らかになったといえる.

表 3 不適切学習頻度と動機づけ (外発)

設問	群	n	m±SD	p 値
Q8	低群	357	2.0±1.0	0.079
	高群	58	2.3±1.2	
Q27	低群	369	2.0±1.0	0.135
	高群	46	2.2±1.1	
Q28	低群	340	2.0±1.0	0.233
	高群	75	2.2±1.2	
Q29	低群	376	2.0±1.0	0.077
	高群	39	2.3±1.1	
Q30	低群	358	2.0±1.0	0.162
	高群	57	2.2±1.1	
Q32	低群	408	2.0±1.0	0.052
	高群	7	2.8±1.2	
Q34	低群	392	2.0±1.0	0.235
	高群	23	2.3±1.2	
Q35	低群	302	1.9±1.0	0.000 ***
	高群	113	2.3±1.0	
Q39	低群	375	2.0±1.0	0.001 **
	高群	40	2.5±1.1	
Q40	低群	388	2.0±1.0	0.001 **
	高群	27	2.6±0.9	
Q42	低群	395	2.0±1.0	0.069
	高群	20	2.4±1.0	

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表 4 不適切学習頻度と動機づけ (取り入れ)

設問	群	n	m±SD	p 値
Q8	低群	357	3.2±0.8	0.414
	高群	58	3.1±0.8	
Q27	低群	369	3.2±0.8	0.577
	高群	46	3.1±0.9	
Q28	低群	340	3.2±0.8	0.782
	高群	75	3.2±0.9	
Q29	低群	376	3.2±0.8	0.547
	高群	39	3.2±0.9	
Q30	低群	358	3.2±0.8	0.961
	高群	57	3.2±0.8	

Q32	低群	408	3.2±0.8	0.839
	高群	7	3.1±0.6	
Q34	低群	392	3.2±0.8	0.193
	高群	23	3.0±0.8	
Q35	低群	302	3.1±0.8	0.006 **
	高群	113	3.4±0.7	
Q39	低群	375	3.2±0.8	0.330
	高群	40	3.1±0.7	
Q40	低群	388	3.2±0.8	0.277
	高群	27	3.1±0.5	
Q42	低群	395	3.2±0.8	0.305
	高群	20	3.0±0.8	

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表 5 不適切学習頻度と動機づけ (同一化)

設問	群	n	m±SD	p 値
Q8	低群	357	4.1±0.8	0.001 **
	高群	58	3.6±0.9	
Q27	低群	369	4.0±0.8	0.001 **
	高群	46	3.6±0.9	
Q28	低群	340	4.1±0.8	0.004 **
	高群	75	3.7±1.0	
Q29	低群	376	4.1±0.8	0.060
	高群	39	3.7±1.0	
Q30	低群	358	4.0±0.8	0.001 **
	高群	57	3.6±0.9	
Q32	低群	408	4.0±0.9	0.083
	高群	7	3.6±0.6	
Q34	低群	392	4.0±0.8	0.171
	高群	23	3.7±1.2	
Q35	低群	302	4.1±0.8	0.002 **
	高群	113	3.8±0.9	
Q39	低群	375	4.0±0.8	0.014 *
	高群	40	3.7±0.8	
Q40	低群	388	4.0±0.9	0.000 ***
	高群	27	3.5±0.7	
Q42	低群	395	4.0±0.8	0.002 **
	高群	20	3.4±0.9	

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表 6 不適切学習頻度と動機づけ (内発)

設問	群	n	m±SD	p 値
Q8	低群	357	3.6±0.7	0.003 **
	高群	58	3.3±0.7	
Q27	低群	369	3.6±0.7	0.000 ***
	高群	46	3.2±0.8	
Q28	低群	340	3.7±0.7	0.000 ***
	高群	75	3.2±0.8	
Q29	低群	376	3.6±0.7	0.000 ***
	高群	39	3.1±0.8	
Q30	低群	358	3.7±0.7	0.000 ***
	高群	57	3.2±0.7	
Q32	低群	408	3.6±0.7	0.009 **
	高群	7	2.9±0.6	
Q34	低群	392	3.6±0.7	0.062
	高群	23	3.3±0.8	

Q35	低群	302	3.7±0.7	0.000 ***
	高群	113	3.3±0.7	
Q39	低群	375	3.6±0.7	0.011 *
	高群	40	3.3±0.8	
Q40	低群	388	3.6±0.8	0.001 **
	高群	27	3.2±0.5	
Q42	低群	395	3.6±0.7	0.001 **
	高群	20	3.0±0.8	

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

4. まとめ

今回の調査で、FD 研究会などにおいて教員の不満として口にされる不適切学習行動が 1 人 2 人の特例ではなく、一定数存在していることが確認できた。また、課題提出に関わらない不適切学習行動は内発的動機づけが低いことに起因していることがわかった。

謝辞

本研究の調査にあたっては東海大学の結城健太郎先生、庄村雅子先生にご協力をいただきました。ここに感謝の意を表します。

参考文献

- (1) 文部科学省: “大学等における遠隔授業の取扱いについて (周知)”, 3 文科高第 9 号 (2021)
- (2) 白澤秀剛, 岩屋裕美, 結城健太郎: “学修行動頻度を用いた遠隔授業時の主体的学修分類尺度の試み”, 第 46 回教育システム情報学会全国大会論文集, pp.79-80 (2021)
- (3) 野田三貴, 辻香代: 2020 年度全学共通教育英語科目に関する教員アンケートの調査報告 - Freshman English と Sophomore English を対象として -, 英語教育開発センター紀要, 3 巻, pp.36-51 (2021)
- (4) 河内 彩香, 村田 晶子, 長谷川 由香, 竹山 直子, 池田 幸弘: 教員と学習者はオンライン授業をどうとらえたか Zoom と Google Classroom を併用した日本語教育, 1 巻 pp.30-45, (2021)
- (5) 溝上拓志, 川戸湧也, 石森靖明, 高橋仁: “遠隔授業に関する実態と ICT 教育推進に向けた検討”, 仙台大学紀要, Vol.53, No.1, pp.23-33 (2021)
- (6) 石川 奈保子, 石田 百合子: 大学オンライン授業における自己調整学習方略の活用と e ラーニング指向性との関連, 日本教育工学会研究報告集, 2021 巻, 1 号, pp.73-80 (2021)

- (7) 岡田涼, 中谷素之: “動機づけスタイルが課題への興味に及ぼす影響 -自己決定理論の枠組みから-”, 教育心理学研究, 第 54 卷, 第 1 号, pp.1-11 (2006)